

# オンライン授業から見えてきたもの



公益財団法人モラロジー道徳教育財団 道徳科学研究所

副所長 宮下 和大

宮下 和大 氏



宮下 和大 氏

各クラス四〇人規模で教員と学生の間、学生と学生の間での双方の対話を重視した展開をはかつてきたところで今回のオンライン授業化となつた。毎回の講義ごとに課題を与え、提出された課題には担当教員がこまめに応答するというやり方で進めているのだが、なにせ受講者数が多いため、毎週その応答に追われる羽目となつた。やはり対面形式で顔が見えるなかで双方に向に対話をしながら共に学んでいくほうが望ましいようく感じるのである。

私が奉職している麗澤大学では二年次の必修授業として「道徳科学」という科目が配置され

ている。麗澤大学の前身は一九三五年に法学博士廣池千九郎が創設した「道徳科学専攻塾」であり、この授業は開校以来継続一貫して開講されている本学ならでは基幹科目でもある。

## 学生たちの道徳への意識

この「道徳科学」の授業も、昨年度と今年度はオンライン授業となり、一学年およそ七〇〇名に及ぶ学生たちに講義動画を一斉に配信して視聴させる形式で行われた。従来、この授業は

た「道徳」授業の印象をそのまま当てはめた反応となるケースが多いということである。つまり、小中学校の道徳を好意的に受け止めてきた学生には大学でも道徳の授業に関心をもつて臨む者が多いが、逆に道徳の授業にあまり価値を見出し得なかつた学生は、当然ながら「大学生にもなつてへ道徳かよ」というような態度になりやすい。そ

の意味では、小学校・中学校・高校での「道徳」の授業は、「道徳」そのものに対する人生態度を形成していく基盤の一つになっているともいえよう。

では、大学生は小中高校での道徳をどのように振り返つていいのか。先述の授業「道徳科学」では毎年第二回目の授業で彼ら／彼女らが受けてきた小中高校での道徳教育についてアンケートに回答してもらっている。「道徳の授業が好きだった／嫌いだつた／どちらでもない」を選んで

た／どちらでもないを選んでその理由を述べてもらうという質問内容である。今年度も令和三年四月に六六一名の大学二年生から回答を得てるのでその概要を以下に示したい。

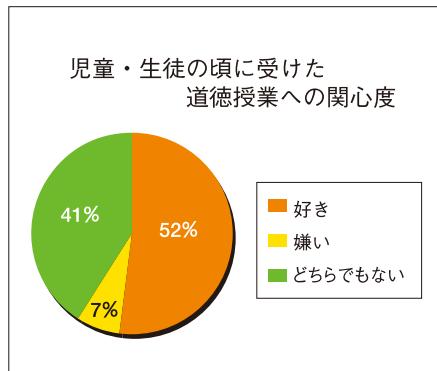
「道徳の授業が好きだったか／嫌いだったか／どちらでもないか」に対する回答では、「好きだった」が五二%（三四四名）、「嫌いだった」が七%（四四名）、「どちらでもない」が四一%（二七三名）であった。約半数がこれまでの道徳授業を好意的に評価して受け止めているものの、残りの半数は好意的に評価していない。

「好きだった」理由は実際にさまざまだが、読み物や物語（教材）が面白かったという意見や、意見を話し合うスタイルが好きだったという意見が多い。

「嫌いだった」理由としては「つまらなかつた」や「押しつけに

「人の気持ちを考えるのが苦手だった」「正解がわからない」などが挙げられるとともに、注目すべきは授業のスタイルに対する苦手意識が非常に多く挙げられていたことである。

「聞いた」「きれいごとに聞こえた」「当たり前のことがばかり」「人の気持ちを考えるのが苦手だった」「正解がわからない」などが挙げられるとともに、注目すべきは授業のスタイルに対する苦手意識が非常に多く挙げられていたことである。



大学ではこうした学生の回答を参考にしながら、道徳を学ぶ目的や意味の解説に時間をかけ、「道徳」そのものについて考えていくように授業を進めているが、他方で「自分の意見をまとめて伝える」というように授業を進めている。が、他方で「自分の意見をまとめ、人前で伝える」ことが、やはり大学の道徳の授業でも求められる。発言に苦手意識をもつ学生にとつてはどうしても後ろ向きな姿勢になりやすいことは小学校も大学も変わらないといふことになる。

### オンラインで意識に変化

以上を踏まえた上で、当該授業のオンライン配信がもたらした気づきにくい価値について述べみたい。

ここまで見てきたように、大学生になるまでに受けてきた道徳の授業について、大学生の約半数は特に好ましい印象を持つ

ていない。開講当初から興味も関心も薄いとなると、教室内では私語をしたり、スマホをいじつたり、居眠りをしたり、他の授業の課題など内職をしたり、ということは、なにも道徳の授業に限らず生じてくる問題である。しかもこうした受講態度は学生相互の間で容易に伝染しやすい。真面目な学生からは苦情が来る。ところが、である。学生がオンラインで提出してくる課題の内容や、オンラインで直接投げかけてくる質問の内容は、通常時に教室内で対面授業を行つていた時よりも、より個人的で具体的に内容が掘り下げられ、自発的に質問してくる人数も明らかに増加しているのである(そのためには、答えに追われているのではなく、嬉しくて笑っている)。予想されるのは次の二点である。

第一に、普段の対面の授業では、周囲の受講態度が気になつて、あるいはその影響を受けて、しっかりと授業に集中することができるなかった学生が、周囲の雑音のない環境で一人パソコンに向かって受講することできつくりと授業に取り組むこと



対面時の「道徳科学」授業風景

「どちらでもない」と答えた理由の多くは「興味関心がなかつ